

# The Result of Fifth Excavation of Kassenhara Ancient Tombs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 秀人, 横山, 舞, 大友, 健太郎, 金澤, 日本, 松田, 進, 阿部, 響祐, 泉, 進太郎, 今野, 友花, 齊藤, 慎大, 崎野, 和音, 高田, 善彬, 高橋, 郁富, 新山, 薫, 葦澤, 光, 村上, 加奈, 村上, 龍太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24971">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24971</a>

# 宮城県亘理郡山元町 合戦原古墳群第5次発掘調査報告

辻 秀人・横山 舞・大友健太郎・金澤 日本・松田 進  
阿部 響祐・泉 進太郎・今野 友花・齋藤 慎大・崎野 和音  
高田 善彬・高橋 郁富・新山 薫・葦澤 光・村上 加奈  
村上龍太郎

## 例 言

1. 東北学院大学考古学辻ゼミナールでは、2018年から宮城県亶理郡山元町合戦原古墳群の調査を継続して実施してきた。合戦原古墳群ではこれまでに緊急調査、測量調査が実施されている。これに加え、2017年に山元町教育委員会が古墳群性格解明のための調査を実施している。この調査を合戦原古墳群第1次調査と理解し、2018年夏の調査を第2次調査、2019年春の調査を第3次調査、2019年夏の調査を第4次調査、2021年夏の調査を第5次調査とした。本書は合戦原古墳群第5次調査の報告書である。
2. 調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールの活動の一環として実施したものである。
3. 調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻学生、考古学ゼミナール所属学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、参加を希望した歴史学科1・2年生である。
4. 作成図面などの整理作業は、東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3年生が中心となって行った。
5. 本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が担当した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものであり、最終的な文責は辻にある。
6. 本書に記載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を指す。

## 調 査 体 制

### 第5次調査

調 査 期 間	2021年8月1日～8月28日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調 査 担 当 者	辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
調 査 員	横山 舞（東北学院大学大学院博士後期課程2年） 大友健太郎・金澤日本（大学院博士前期課程1年） 阿部遼人・松田 進・松橋七海（歴史学科4年） 阿部響祐・泉進太郎・今野友花・齋藤慎大・崎野和音 高田善彬・高橋郁富・新山 薫・葦澤 光・村上奈加 村上龍太郎（歴史学科3年） 赤塚理映・阿部昂平・小野寺詩乃・菅野晴花・菊地 舞 木下聖咲・小嶋健斗・高坂柚羽・高橋 楓・千葉亮介 月館勇哉・平尾優太・平塚千優・福島康介・本間大志

村上知穂・森谷華帆・横山 純（歴史学科2年）

上野こまち・花里亜利沙（歴史学科1年）

調査協力 山元町教育委員会 山田隆博  
土地所有者 山元町



写真1 作業風景

### これまでの調査概要

合戦原古墳群は昭和38年に国道6号線改修工事で一部破壊されることになり、事前に調査されたことがある。3基の古墳が調査されたが、埋葬施設は発見されず、若干のガラス小玉が出土した（宮城県教育委員会1965）。また、1996、1997年には考古学研究者有志による測量調査が実施され、古墳群全体の姿が明らかにされた。（青山・岩見・鈴木・田原・藤沢2000）。

2017年には山元町教育委員会により史跡公園整備のため発掘調査が実施された。これまでの調査を踏まえて、東北学院大学考古学辻ゼミナールでは、古墳群の様相の解明と年代特定を目的とし、第2、3次調査（辻2020）、第4次調査（辻2021）を行った。

第2、3次調査では、最大の円墳である1号墳と、最高所に築かれた前方後円墳である5号墳を対象とした。調査の結果、1号墳では墳頂平坦面に埋葬施設を発見し、木棺直葬であることを確認した。調査終了後の写真整理の段階で、木棺よりやや広い範囲に白色粘土を敷いていることが判明した。5号墳は土地所有の問題で全面を掘り下げることができなかったが、測量の結果、全体像を把握することができた。5号墳は前方部が細長く、地

形を利用して築かれていることが判明した。

第4次調査では5号墳の東側に築かれた円墳である6号墳と古墳群の中で東端に位置する円墳である4号墳を対象とした。調査結果から4, 6号墳のいずれも西から延びる尾根の先端を切り、土を積んで構築している。このため、それぞれの古墳は東側から見ると墳丘が高く、大きく感じられ、西から見ると墳丘が低く感じられる。この構築方法は1号墳でも同様に確認でき、未調査の古墳も同様の姿をしていると思われる。これは合戦原古墳群における墳丘構築の特徴と考えられる。

## 参考・引用文献

- 宮城県教育委員会 1965年「合戦原古墳群調査概報」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第8集
- 青山、岩見、鈴木、田原、藤沢 2000年「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第2号
- 辻秀人ほか 2020年「宮城県亶理郡山元町合戦原古墳群第2, 3次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第61号
- 辻秀人ほか 2021年「宮城県亶理郡山元町合戦原古墳群第4次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第63号

## 第1章 古墳群の概要

### 1. 古墳群の立地

合戦原古墳群は、宮城県亶理郡山元町高瀬字合戦原に所在する。阿武隈高地から樹枝状に東へ伸びる丘陵末端部に立地する。現状では、国道6号線までに接する位置にあたる(第1図)。古墳群東側台地上に平坦な地形があるが、その先は海岸平野で、太平洋に臨んでいる。

古墳群の周辺には多くの製鉄遺跡群が分布しており、この地域が福島県浜通り地方に展開する製鉄遺跡群の北端であることが判明している。また、南東約4kmには木簡が出土し、古代官衙と目される熊の作遺跡があり、古墳群の南西に接して54基を数える大規模な横穴墓群で、豊富な遺物を持ち、線刻画が発見されたことで知られる合戦原横穴墓群がある。

### 2. 合戦原古墳群の概要

本遺跡は、前方後円墳と円墳で構成されている。前方後円墳は最高所に位置し、全長25.4m、前方部前端幅約10.0m、後円部直径約15.7mである。円墳は現状で7基が確認されている(第2図)。1963年に実施した緊急調査で対象とされた円墳3基は、すでに失われている可能性があり、本来は前方後円墳1基と円墳10基程度で構成される古墳群であったと考えられる。



第1図 合戦原古墳群の位置（国土地理院 GSI マップに加筆）

## 第2章 発掘調査

### 1. 第5次調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、合戦原古墳群の実像を解明し、築造年代の特定を目的として発掘調査を継続してきた。第2、3次調査では調査では1号墳の墳丘、5号墳（前方後円墳）墳丘形態を明らかにした。続く第4次調査では4号墳、6号墳の墳丘構造、埋葬施設の解明を目指したが、6号墳では墳丘構造は解明できたが、埋葬施設の探索までは至らなかった。4号墳では墳丘構造解明のため、墳裾を追求したが、土量が多く、墳裾を全周にわたって検出するには至らなかった。そこで、今回の第5次調査では、6号墳の埋葬施設、4号墳の墳丘構造、埋葬施設の構造を明らかにすることを目的に調査を実施した。

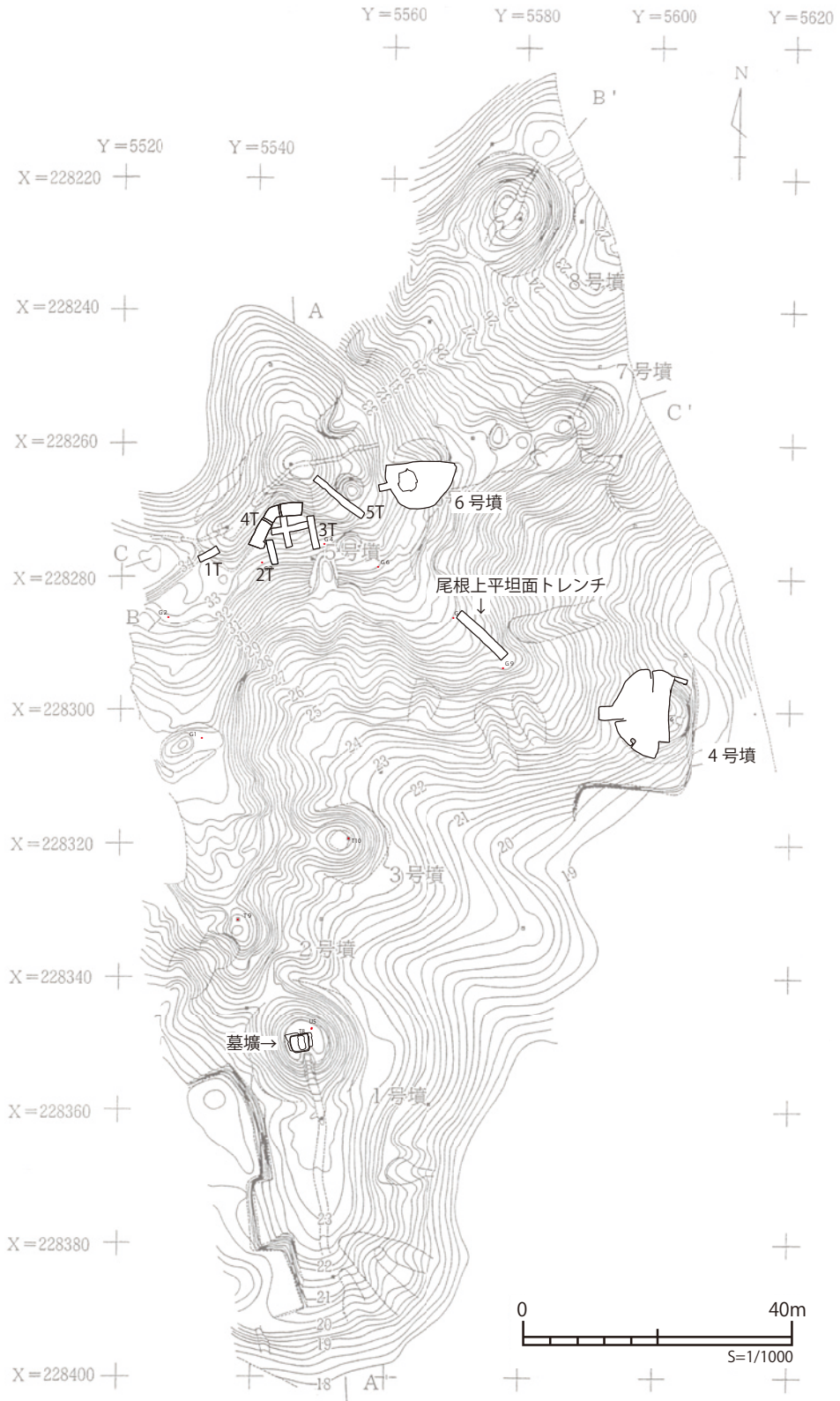
### 2. 調査成果

#### (1) 4号墳

4号墳は墳丘東側の1/3ほどが国道6号線の改修工事によって失われている。4次調査では、山元町の調査によって設定された十字のトレンチ（旧トレンチ）が確認され、旧トレンチが墳頂付近では墳丘表面より深く掘られていることが判明した。

5次調査では、4次調査段階で未検出だった墳丘面の検出作業を行った。この調査では新たにトレンチを設けず、旧トレンチを利用し墳端の検出作業を行った。国道6号線改修

宮城県亙理郡山元町合戦原古墳群第5次発掘調査報告



第2図 合戦原古墳群測量図とトレンチ配置図

青山、岩見、鈴木、田原、藤沢 2000 年「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第2号  
第4図に加筆

で失われた東側を除き、墳端の立ち上がりを確認できた(写真2)。その後4号墳の図面作成を行い、直径約10.8m、高さ約2.2mの円墳であることが分かった(第3図)。墳丘は西側から延びる丘陵の尾根筋を浅く切り、尾根の先端に土を積み、丘陵末端の傾斜を利用して墳丘を築いていることが判明した(写真3)。墳丘北側では墳丘下に黒色土がみられ、旧表土と判断した。墳丘は古墳築造前の地表面の上に土を積んで構築されていると考えられた。

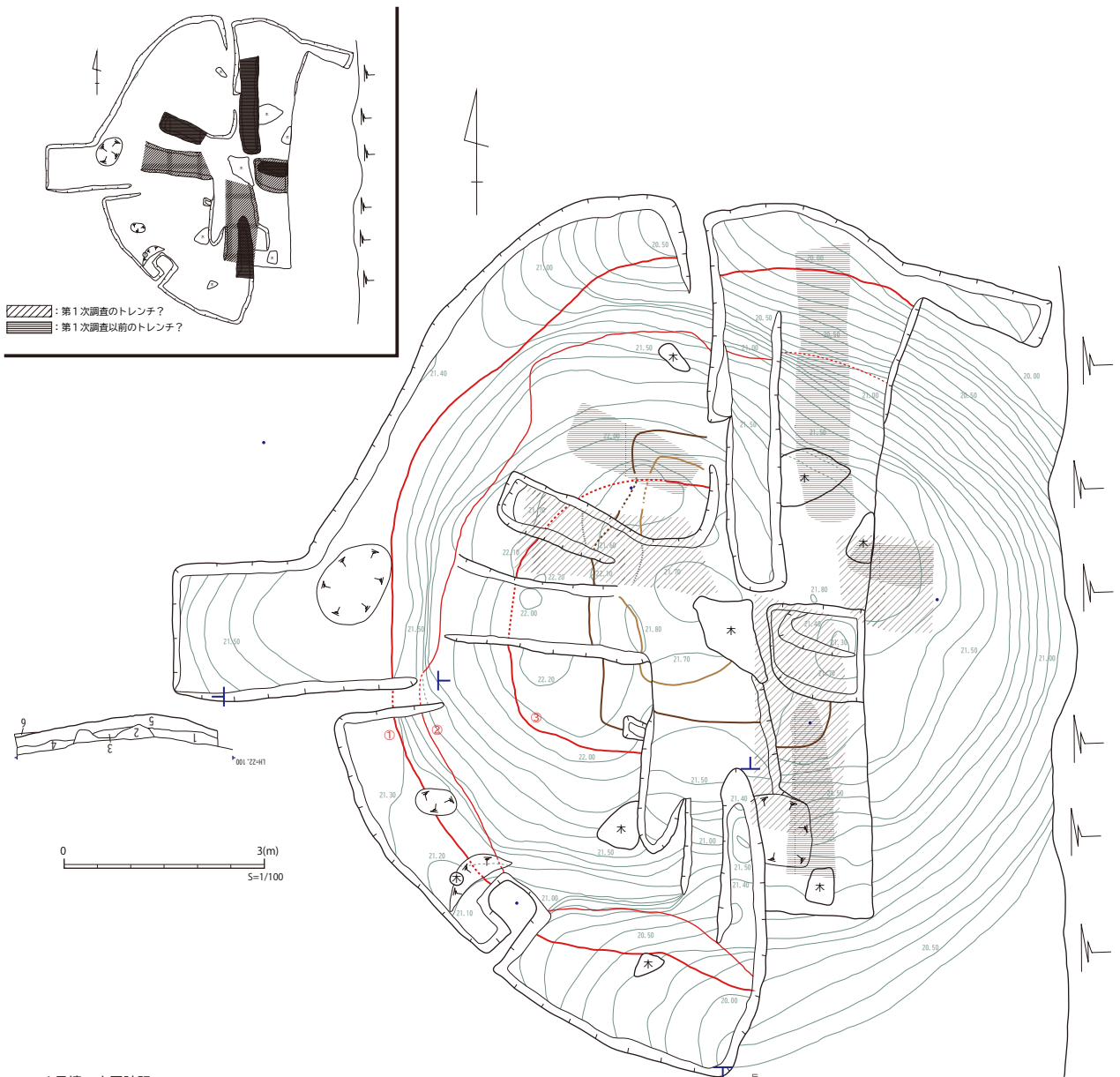


写真2 4号墳南側墳端



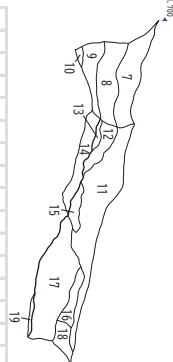
写真3 4号墳全景(撮影 北東→南西)





4号墳 土層註記

色調	粘性	しまり	粒度	備考
1 10YR 4/3 にぶい黄褐	弱	弱	シルト	
2 10YR 2/3 黒褐	弱	弱	シルト	根による攪乱
3 10YR 3/4 暗褐	弱	弱	シルト	根による攪乱
4 7.5YR 3/4 暗褐	弱	弱	シルト	根による攪乱
5 10YR 4/6 褐	弱	弱	シルト	[7.4YR 3/3 暗褐]が混在
6 10YR 6/6 明黄褐	弱	弱	シルト	地山層
7 10YR 4/6 褐	弱	弱	シルト	後世の掘り込みか
8 10YR 4/6 褐	中	中	シルト	後世の掘り込みか
9 10YR 4/6 褐	中	中	シルト	後世の掘り込みか (層8より、粘性強)
10 10YR 4/6 褐	中	中	シルト	後世の掘り込みか (層8より、しまり弱)
11 10YR 5/6 黄褐	弱	弱	シルト	
12 10YR 5/6 黄褐	弱	弱	シルト	層11より、粒度細かい
13 10YR 5/8 黄褐	中	中	シルト	
14 7.5YR 5/8 明褐	弱	弱	シルト	地山層
15 10YR 4/6 褐	中	中	シルト	
16 10YR 3/4 暗褐	中	中	シルト	
17 10YR 3/4 暗褐	中	中	シルト	層16より、粘性強
18 10YR 4/6 褐	中	中	シルト	[10YR 5/8 明褐]が混在、[10YR 4/6 褐]より若干暗め
19 10YR 4/6 褐	中	中	シルト	地山層、[10YR 5/8 明褐]が混在



- : 傾斜変換線
- ① 墳端
- ② 傾斜変換 (※地山と盛土の境?)
- ③ 墳頂平坦面
- : コンター
- : 墓壇ライン (推定)
- : 土色・土質の違いが見られたライン (※墓壇 / 陥没坑の可能性含む)
- ..... : 掘り込み? (※墓壇 / 陥没坑の可能性含む)
- ▨ : 第1次調査以前のトレンチ?
- : 第1次調査のトレンチ?

第3図 4号墳平面・断面図

埋葬施設検出のため墳頂平坦面で精査を行った。その際、墓壙と思われる土質や土の色の違いが部分的に認められる箇所があることが判明した。その範囲は南北約3.4 m、東西約1.3 mである。ただ、墳丘面には幾つかの土質の違う部分があり、墓壙か否かさらに検討が必要である。

今回は、墓壙の確定、埋葬施設の解明を目的に調査を実施する予定である。

## (2) 6号墳

4次調査では、古墳の形状の確認のために十字にアゼを残し区画を設定し、表土と堆積土を平面的に掘り下げた。全区画で表土と堆積土の除去が完了し、墳丘面の検出が完了した。墳丘の規模が直径約7.6 m、高さ約2.6 mの円墳であることが確認された。6号墳も4号墳同様に西側から延びる尾根筋を切り尾根筋末端に土を積んで墳丘を構築している（写真4）。4次調査段階で、墳丘面で土質の異なる部分を検出しており、墓壙と推測していた。

5次調査では、4次調査終了段階で確認された土質の違いについて再度精査を行い、墓壙と思われる平面プランを検出した。掘り下げ後、墓壙のラインの内側で土のしまりが弱く粘土質の土が平面で検出されたため、これを陥没坑の上面と考えた。陥没坑をある程度掘り下げ、墓壙の掘り下げに移行した段階で、陥没坑の周囲に粘土が広がることを確認した。後に写真整理の段階で、この粘土層が陥没坑上面の周囲にまで存在することを確認できた。その後再び陥没坑内を掘り下げると、黒色の土層が確認された。これを木棺痕跡と認識し掘り下げ、棺の底面を検出した。棺の規模は長さ約1.7 m、幅約0.51～0.63 mであることが分かった（第4・5図）。棺底には周囲の粘土層が連続しており、棺周囲の粘土が



写真4 6号墳全景（撮影 南→北）



6号墳 土層註記

色調	粘性	しまり	粒度	備考
20 10YR 3/4 暗褐	弱	弱	シルト	腐植土
21 10YR 4/4 黄褐	中	中	シルト	墳丘堆積土 (濁った黄色)
22 10YR 5/6 黄褐	中	中	シルト	層21を掘り抜いた可能性あり
23 10YR 4/3 にぶい黄褐	中	中	シルト	
24 10YR 5/4 にぶい黄褐	中	中	シルト	
25 2.5Y 5/6 黄褐	中	中	シルト	
26 2.5Y 5/4 黄褐	中	中	シルト	
27 10YR 5/6 黄褐	中	中	シルト	
28 2.5Y 6/6 明黄褐	弱	弱	粘土	地山層 (白っぽい)
29 2.5Y 4/6 オリーブ褐	弱	強	粘土	地山層
30 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐	中	中	シルト	墳丘積土
31 10YR 4/2 灰黄褐	弱	弱	シルト	地山の上 (堆積土)

第4図 6号墳平面・断面図



第5図 6号墳埋葬施設平面・断面図

陥没坑上面でも確認されることから木棺の安置のために棺周囲を粘土で覆っていたものと考えられる。構造だけ見ると埋葬施設は粘土槨に共通した造りだと考えられる。陥没坑に堆積していた粘土質の土は、もともと棺上面を被覆していた粘土が木棺の崩壊によって落ち込んだものと考えられる。棺周囲の粘土と墓壙の土の違いは非常に微妙なものであり、観察に観察を重ねた結果認識できた（写真5・6・7）。



写真5 6号墳埋葬施設



写真6 陥没坑上面



写真7 棺底検出後断面

次回の調査では、棺の周囲に広がる粘土がどのようなものであるかを確認するために棺底の粘土の一部を断ち割り、埋葬施設の全体像を把握したいと考えている。

## ま と め

合戦原古墳群第5次調査では4・6号墳の古墳の規模・形状と構築方法、6号墳の埋葬施設の構造を明らかにすることができた。

合戦原古墳群中の円墳には、1号墳も含め西から延びる尾根の先端を切って尾根筋から切り離し、残された丘陵末端に土を積んで墳丘を構築する共通構築方法があることが判明した。そのため墳丘は西側からは低く見え、東側からは高く見える。この点は合戦原古墳群墳丘構築方法の特徴と言えよう。

埋葬施設は1これまで1号墳、6号墳で確認できた。いずれも木棺直葬であるが、粘土を用いて木棺を覆っていることが判明した。1号墳では木棺を埋納下の地に上面に粘土を敷いていた。このため、木棺内部には上面に強い粘土が落ち込んで居る様子が確認された。一方、6号墳では、木棺の周囲と上面を粘土が固めている様子が確認された。6号墳で確認された木棺周囲、上面を粘土で覆う構造は、一般的に言う粘土槨と同じである。次回の調査では、木棺痕跡の一部を断ち割、木棺下層の構造を確認した上で再度検討したい。ただ、従来木棺直葬とだけ認識されていた埋葬施設も詳細に観察すれば棺を覆う何らかの施設が構築されている可能性があるのだろう。小規模な円墳に調査においてもこの点は十分に注意する必要があると考える。

今回の調査でも、年代推定可能な遺物は出土しなかった。年代の推定は難しいが、小規模な前方後円墳を中心に円墳群が分布する様相、埋有相施設が木棺直葬であることから、現時点では、合戦原古墳群の築造年代を5世紀代と考えておきたい。

次回は、6号墳の埋葬施設構造の解明と4号墳の埋葬施設探索と解明を目指して調査を実施したい。

### 謝辞

調査の実施に当たっては、コロナ禍にありながら調査環境を整えていただきました山元町教育委員会をはじめ関係機関の皆様、調査を温かく見守っていただきました山元町の皆様にご協力を感謝申し上げます。



4号墳調査風景